

事例
報告

いきいき チャレンジ精神



事例 0.1 信用と新鮮が 一番の売り、彩市場

高知県四万十市竹島地区では、国営農地開発事業により果樹面積が、21haに拡大し、専業農家の大規模経営による果樹産地として大きく発展しました。平成14年には、生産者グループである、「四万十果友会」が発足し、地域ブランドとして商標登録されています。また、平成17年には、直販所「彩市場」が開店し、大勢のお客でにぎわっています。



事例 0.2 女性パワーで地域づくり えーのー 一夢豆腐

安芸高田市可愛地区では、ほ場整備事業がきっかけとなり「農事組合法人えーのー」が設立され、大豆への転作が進んでいます。「農事組合法人えーのー」の女性部のお母さん達は、大豆を活用して「豆腐を作りたい!!!」と活動を始めました。努力の末、地元ならではの「えーのー一夢豆腐」を生み出し、レストラン「夢茶屋」をオープンしました。健康的でバラエティーに富む豆腐料理は地元だけでなく都市部の住民にも評判になり、連日多くの方が訪れています。元気な営農組合が新しい食文化を生み出したのです。



女性部の人たち(上) 豆腐料理(右)

事例 0.3 地域ブランドの創出 キャベツキムチ

石狩平野に位置する南幌町では、昭和55年から始まった経営体育成基盤整備事業により水路、排水路、暗渠排水、区画整理を行いました。これをきっかけに4~5戸の農家が集まった3つの法人が設立され、効率的な農業を行っています。この結果、南幌町のキャベツ生産は北海道の中で2位となりました。このキャベツを使って町おこしグループがキャベツキムチの製造販売に取組んだ結果、町の新たな名物となり町のPRや活性化につながっています。



事例 0.4 川上レタスを台湾に

長野県川上村は日本一のレタス産地です。この川上村のレタス畑の大部分は、農業農村整備事業によって整備されたものです。川上村は、アメリカからの輸入に頼っている台湾に、安全・安心かつ新鮮なレタスの輸出をはじめました。台湾の消費者からは、アメリカ産等のレタスに比べ「鮮度がよく、甘くしゃきしゃきしている」として好評を得ています。また、農家の意欲も高まっています。



事例 0.5 奥貝塚・彩の谷 たわわ

貝塚市が所在する大阪府泉州地域は、府内の農地の約38%を占める都市近郊型の農業地域です。平成10年度からはじまった田園空間整備事業により、農業庭園「奥貝塚・彩の谷 たわわ」が整備されました。この農園の運営は、整備構想の段階から参加していた自治会や農家が中心に設立された農事組合法人が行い、豊かな自然を保全・活用した市民農園を都市住民に提供しています。また、まぼろしの水ナス「馬場ナス」の復活とブランド化に取り組んでおり、直販をはじめ順調に販路を広げています。

事例 0.6 日本一のぶどうとワインのまちに

ぶどうとワインづくりの歴史を持つ甲州市勝沼町に「勝沼トンネルワインカーブ」が完成しました。この施設は、鉄道線の廃止されたトンネルをワイン貯蔵用に整備したもので、ワイン熟成に最適な環境を持つものです。施設完成後、個人オーナーとして県内外から多くの申込者があり、また多数の見学者が訪れています。

甲州市では「勝沼タイムトンネル100年構想」の一環として田園空間整備事業を活用した産業史跡を巡る遊歩道の整備を進めており、本施設は、ぶどう及び国産ワイン発祥の地を巡るタイムトンネルとして産業・観光両面から一層の振興が期待されています。

